

# 「市民・企業・行政をつなぐ、 自然と共存する都市再生型エコ・ツーリズムの展開」

日時：2010年11月23日（祝）

会場：慶應義塾大学日吉キャンパス藤山記念会館

TR ネットが2010年度取り組んできた「鶴見川流域クリーン&ウォーク 2010」の総括と、足もとを楽しみ地域に貢献する自然と共存する都市再生のツールとしてのエコ・ツーリズム推進に向けて、慶應義塾大学日吉キャンパス藤山記念館において「鶴見川流域ツーリズム・フォーラム」を開催しました。

午前の部は、慶應大学・日吉丸の会の案内で、紅葉で色づいた森を眺めながら、日吉の森を散策しました。途中、オオタカも現れました。途中、鶴見川流域クリーン&ウォークの一環としてクリーンアップを実施。さらに、雑木林再生・水循環回復が進む一の谷では、絶滅危惧種であるホトケドジョウを観察しました。

午後の部は、まず鶴見川流域クリーン&ウォークの総括として、このイベントに参加した6団体から、その様子を報告いただきました。単に歩くだけではなく、クリーンアップに加えて、行政の治水施設を見学する、企業と連携して実施するなどといったイベントが目立ちました。次に、2010年は国際生物多様性年であり、また目的である「自然と共生する都市再生」について再確認するため、代表理事であり慶應義塾大学教授の岸先生より「生物多様性と共存する都市再生に向けて」と題した講演をいただきました。さらに、昨年度のツーリズム・フォーラムにおいて、エコ・ツーリズム推進のためには「人・地域・異業種のネットワーク」が重要であることを確認しました。そこで今年度は、「CSR活動としてのエコ・ツーリズム活動」をテーマに、キリンビール横浜工場との連携クリーンアップについて npoTR ネットから、京急グループとの連携を NPO 法人小網代野外活動調整会議・NPO 法人流域自然研究会から、npoTR ネットとの連携をスーパー銭湯おふろの国・トレッサ横浜から、それぞれ事例として発表いただきました。なお当日は、鶴見川流域水協議会を代表して京浜河川事務所の方々もご出席くださいました。

鶴見川流域ツーリズムは、流域単位で市民・企業・行政をつなぐツールとして、確実に成果をあげてきたことを実感できた1日となりました。特に課題であった企業との連携は、その絆をより深めるとともに流域ツーリズムの広がりを感じることができたと思います。今後、企業 CSR 活動としての展開など企業・行政等との連携で、より地域貢献度の高く、そして多様性のある流域エコ・ツーリズムを実現させ、自然と共存する都市再生を支援してまいります。



## 午前の部 慶應大学日吉の森 散策

案内 慶應大学・日吉丸の会

---



日吉の森をクリーンアップ



雑木林・水循環回復が行われている一の谷

## 共催者挨拶

和光大学地域・流域共生センター

---



## 鶴見川流域クリーン&ウォーク2010のまとめ

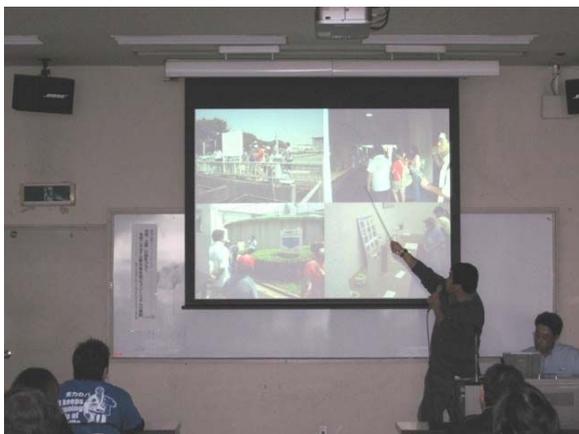
### 各実施団体



NPO 法人鶴見川源流ネットワーク  
「鶴見川源流ウォッチング」  
「いるか丘陵とことん巡り 鶴見川源流編Ⅹ」



谷本川流域ネットワーク  
「谷本川クリーン&ウォーキング」



NPO 法人鶴見川流域ネットワーク  
港北水再生センター見学会  
「水再生センターに行って水質の謎に迫る」



NPO 法人鶴見川流域ネットワーク  
「駅からリバー&クリーンウォーク！  
鶴見川・鶴見～トレッサ横浜編」



下流ネット・鶴見  
「おふろの国ウォーク」



NPO 法人鶴見川流域ネットワーク  
「キリンビール横浜工場クリーンアップ」

## 講演「生物多様性と共存する都市再生に向けて」

講師 慶應義塾大学教授 岸 由二氏

### <要約>

#### 【足元での楽しみが都市の再生につながっている】

鶴見川流域ネットワーク（以下、TR ネット）が進めている「鶴見川流域ツーリズム」は、身近な自然を見て歩く、街を見て歩くなど、足元での面白い体験を都市の再生に何らかの形でつなげていく仕掛けの様々な工夫の1つです。そのためにいわば「社会実験」を続けています。今日のフォーラムの前半の話題であった「鶴見川流域クリーン&ウォーク2010」もこの1つです。「クリーン&ウォーク」は、ごみ拾いをしてちょっと歩くというのがありますし、たくさん歩いてちょっとごみ拾いをするというのがあります。



どちらかという、TR ネットによる「クリーン&ウォーク」はたくさん楽しんでゴミは五分しか拾わないというようなスタイルが多いです。腰が痛くなるほどゴミを拾わせて、もう二度と川に来たくないと思わせてしまっては意味がありません。生きものを調べて楽しかったけれど、ごみも拾ったから、今日は流域貢献したとみんなで言い合って、今日は良い事をしたとみんなが思うことが重要だと考えています。今回の「クリーン&ウォーク」は、(社)日本河川協会を通してライオン㈱から「きれいな川と暮らそう」基金という助成金をいただいて実施することで、TR ネットがライオン㈱のCSR活動の仲買人となって、鶴見川流域貢献をしました。もとをたどれば、鶴見川流域貢献をしたのはライオン㈱になりますが、このような貢献の連鎖が都市の再生に極めて重要だという考え方を確認していきたいと思います。楽しみながら流域・丘陵の環境に貢献をするという議論の基本に、われわれはどういう問題を見てどう考えているのかというのを、考えてみたいと思います。

#### 【地球環境危機と都市の再生】

『地球環境危機というのは指数関数的な拡大を続ける都市の産業文明が地球の生命圏の制約と衝突する危機である。これに対応していくためには、何よりも足元の生命圏を人と自然が共存し住まうべき生態系としてテーマ化すべき』というのが私の主張ですが、都市産業文明において私たちは「テーマ化=我々が暮らしている世界は、我々と生きものが共に暮らし、我々がここにずっと暮らしていく生態系と認識する」ことができず、ひたすら資源空間として実利的に認識しています。例えば、私たちは横浜市港北区に暮らしていると認識して何も怖くはありませんが、採取狩猟の暮らしをしていた人はそんな認識はなかったはずで、今自分のいる足元から50メートル行くと長さ数百メートルの谷があって、その真ん中にはドジョウのいる池があってその一番上にはどんぐりの雨を降らせる檜の木があって・・・という認識で世界を見ていたに違いありません。「生命圏を人と自然が共存し住まうべき生態系としてテーマ化する」というのはこういうことですが、現在の私たちの世界認識の基本にはありません。私たちは、都市計画のための資源で

ある、場所によって土地価格が違う、お金の換算すると値打ちが違う、広がりがあるのくらい・・・という認識をしていますが、これは私たちの都市産業文明の特徴なのです。

しかし、そういう都市の真ん中で足元から生命圏と共存できる都市の文化を創造していかなければ、地球環境危機を乗り越えられないという認識があります。これがまさに「自然と共存する都市の再生」という課題になるわけです。その処方箋として提案しているのが、都市の足元の大地を生命圏の単位生態系として捉えていくことです。そうすれば、地球に対する資源や空間としての認識が、リアルに共存しなくてはいけない制約のある生態系と認識できると考えています。より具体的にいえば、生命圏の単位生態系として足元の「流域」を把握し、まずは生態系水循環の制約や可能性としっかり共存する都市の文化を育てていくことです。これを「流域思考の都市再生」と言っています。

流域とは、降った雨の水がある川の河口に出ている大地の範囲のことです<図1>。降った雨の水がA川の河口に出てくる範囲をA川の流域といいます。降った雨の水がB川に出てくるこれをB川の流域といいます。川の流域の間は分水界になっています。

### ●流域：雨の水が水系に集まる大地の領域

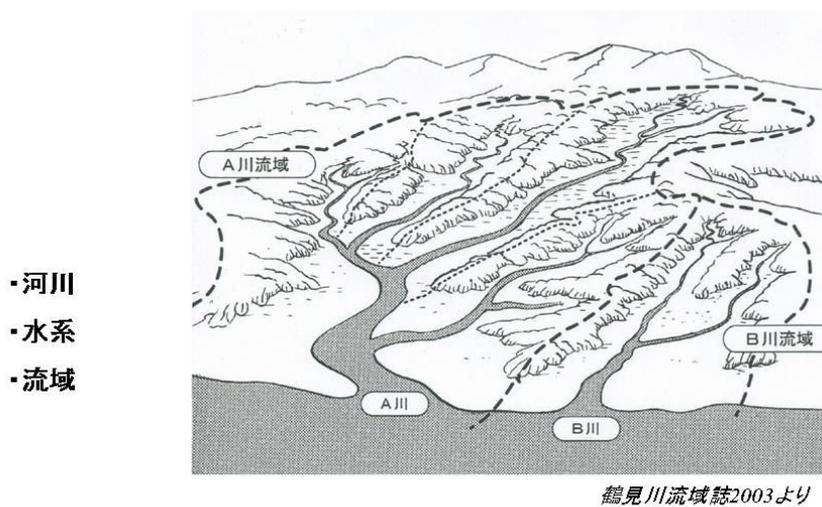


図1 流域とは

#### 【流域思考の都市再生は、足元の流域・丘陵図の共有から】

「流域思考の都市再生」には、頼りとすべき足元の地図をもう一度作り直さなければなりません。お金を稼ぐために「頼り」とする地図は、資源・空間の地図です。山があっても谷があっても、駅から近いから高く売れる、だから谷は全部埋めてしまうという発想になります。しかし、自然と共生する都市再生をするために「頼り」とする地図は、足元の流域丘陵地図です。

これを大きく分けると、「計画の地図」と「楽しみの地図」になります。計画の地図は、そういう地図でやらないと仕事が出来ない人が持っています。例えば、鶴見川流域では、鶴見川を管理している国土交通省京浜河川事務所の人たちは、流域の「計画の地図」を持っています。国土交通省京浜河川事務所は鶴見川流域で水害を防止する仕事をしているわけですが、その水害は港北区で起きるわけでもないし、鶴見区で起きるわけでもなくて、鶴見川流域という生態系が起こす

ため、好きでも嫌いでも、哲学があっても無くても、「計画の地図」は流域になります。ちなみに、国土交通省京浜河川事務所が行政の事務局となって推進している「鶴見川流域水マスタープラン」は、鶴見川流域の「計画の地図」をベースに策定された計画です。

これとは別に、「楽しみの地図」があります。「なんだか歩いていると面白い、どこを歩いているの？ 鶴見川流域は何の形？バクの形。バクの流域を歩いているの。歩いている時にバクさんバクさんと言って歩こう」など、一見ふざけているような活動で出来てくる地図で、資源や空間ではなく、流域という大地の凸凹の面白い世界に私たちは住んでいるんだという認識を人々に作ることが出来たら、どんなにすばらしいことでしょうか。この楽しみをウォーキング、バスツアーなどのツーリズムにして、その楽しさで形成される地図作りが、同時にクリーンアップにつながったり、様々な流域計画を応援する市民の育成につながったり、流域文化の創造につながったり、あるいは企業のCSR活動の活性化につながるなどの仕掛けになると考えています。自然共生型都市再生に向けた、企業のCSR活動としての貢献、市民貢献を、エコ・ツーリズムという回路を通して育てていくというのが仕事と、TRネットは考えています。

## 【地球環境危機－3つの危機】

### (1) 人口・食糧・資源の危機

地球環境危機、様々な危機がありますが、大きな危機は3つです。1つ目は人口と食糧・資源の危機。2つ目は気候変動の危機。3つ目は生物多様性の危機。ポイントだけお話しします。

1つ目は、人口と食糧・資源の危機です。大変深刻ですが、あまり話題になりません。世界人口を、2050年に90億人に達しないところでコントロール出来れば、地球人口は100億人に達しないで資源制約に衝突しないというのが、国連の推定です。そのために全力必死で色々な事をやっています。アメリカ合衆国国勢調査局がインターネット上で公表している World Population Clocks（世界の人口の予測値を示している）によると、今朝（2010年11月23日）時点の世界人口の予測値は6,883,249,221人、もうすぐ69億人に達する数字です。この70億近い人が、地上で生産される年間20-21億tの穀物を頼りにして地球で暮らしています。1人当たり換算すると穀物では300kgで十分な量になるのですが、先進国の人は穀物を牛や鶏に食べさせて、肉にしたりミルクにしたりチーズにしたりして食べますから、口に到達する時は数百グラムの食事でも、元の穀物は数十kgということは普通です。皆さんも穀物ベースで年間400~500kgは食べています。また、備蓄量が非常に不安定になっています。大飢饉や大渇水があると大幅に備蓄量が落ちます。備蓄量が落ちると穀物市場が暴騰するので、お金の無いところの人は食べられなくなって、そこで餓死がおこります。それがいつ起こってもおかしくない状況がずっと続いています。温暖化がなぜ心配されるかという、大飢饉を促す大きなきっかけになるというのが1つの理由です。過去にも何回も大飢饉がありましたが、現在も食糧は決して安全な状態ではありません。先日、尖閣諸島の事件を発端とする中国との政治的関係悪化によりレアメタルの調達が問題になりましたが、石油・石炭など資源のどれもこれも、人口拡大に比べれば非常にきつい状況になってきています。あと100年こんな状況が続くとは誰も考えていません。2050年あたりが最も困難な状況になるのでしょうか。

### (2) 気候変動の危機

2つ目は、気候変動の危機です。これは、地球温暖化の話です。地球温暖化の話は、大体の人がしっかりした根拠を教えられずに議論をしています。しっかりした根拠をお話しします。地球の気温は、およそ10万年の周期で上昇と下降を繰り返しています<図2>。最も気温が下降し

た時期が「glacial bottom 大氷河期」です。今から2万年前、このあたり（横浜市港北区）は現在より数度平均気温が低く、海面が130mくらい低かったことが分かっています。このあたりは全部が雪原・氷原・万年雪、東京湾は湾口まで陸です。全ての東京湾の川は一本の川で浦賀の辺りで太平洋に注いでいました。それが1万5千年くらいでものすごい勢いで暖かくなって、今から6500年前くらい前には、海面が今より5mほど高くなりました（縄文海進）。日吉キャンパスの裏側、崖の下は当時激しい波が打ちつける波打ち際だったことが分かっています。鶴見川の沖積低地、横浜市緑区鴨居あたりまでは海の中でした。その後、気温は下降に転じました。これまでの地球の気温変動の記録から推定すれば、次の氷河期に向かってあと8万年かけて寒い時代に行くだろうとまじめな学者はみんな思っています。しかし、最近になって気温の上昇がありました。これが、温暖化ガスで生じている温暖化です。地史的なプロセスでいえば、地球が寒くなっていく端緒のところ、一気に暑さが来て、もしかしたら寒冷化も阻止されてしまうかもしれません。これに保険を掛けるかどうかは温暖化の大きな議論です。人類はあと何年生きるつもりですか。あと1000年か2000年生きるつもりであれば、保険を掛けたほうがいいのではないかというのが、現在の温暖化の議論です。

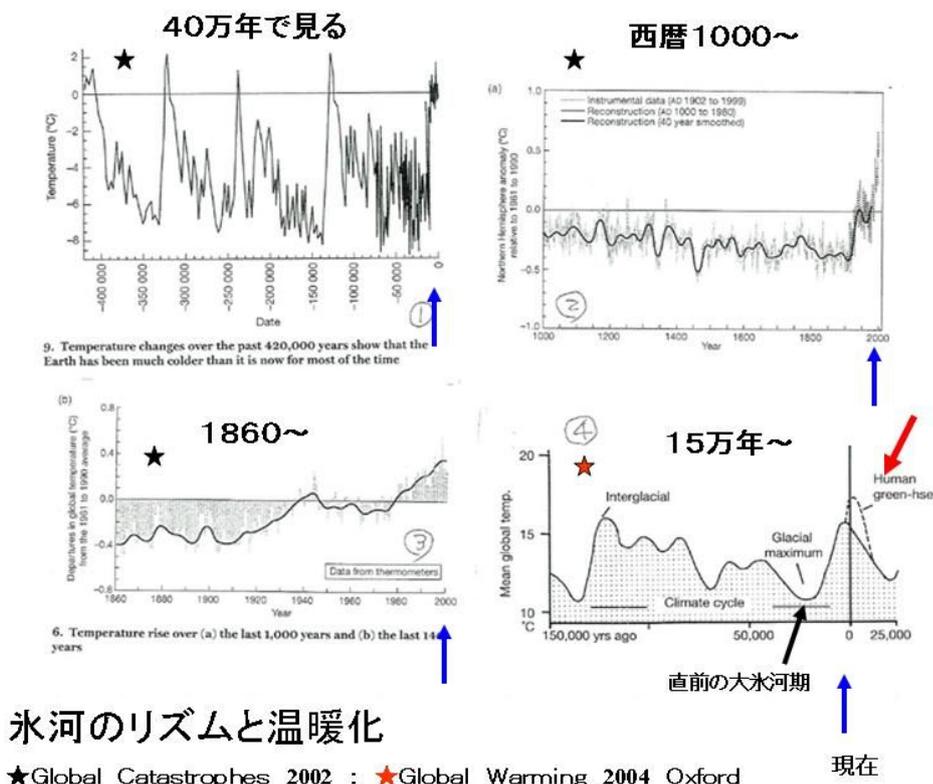


図2 地球の気温変動

温暖化が進むと、具体的にはどのような現象が発生するのでしょうか。国土交通省の推定によると<図3>、日本では、夏季の豪雨日の日数が増えています。時間50~100mmの雨が降る頻度が上がっています。日本列島では、2080年~2099年くらいに、北海道と東北など列島の北へ行けば行くほど豪雨がひどくなるという推定になっています。九州・四国辺りは乾燥・渇水してくるという推定もあります。

## 集中豪雨は増加傾向にあり、今後も増加が予測される

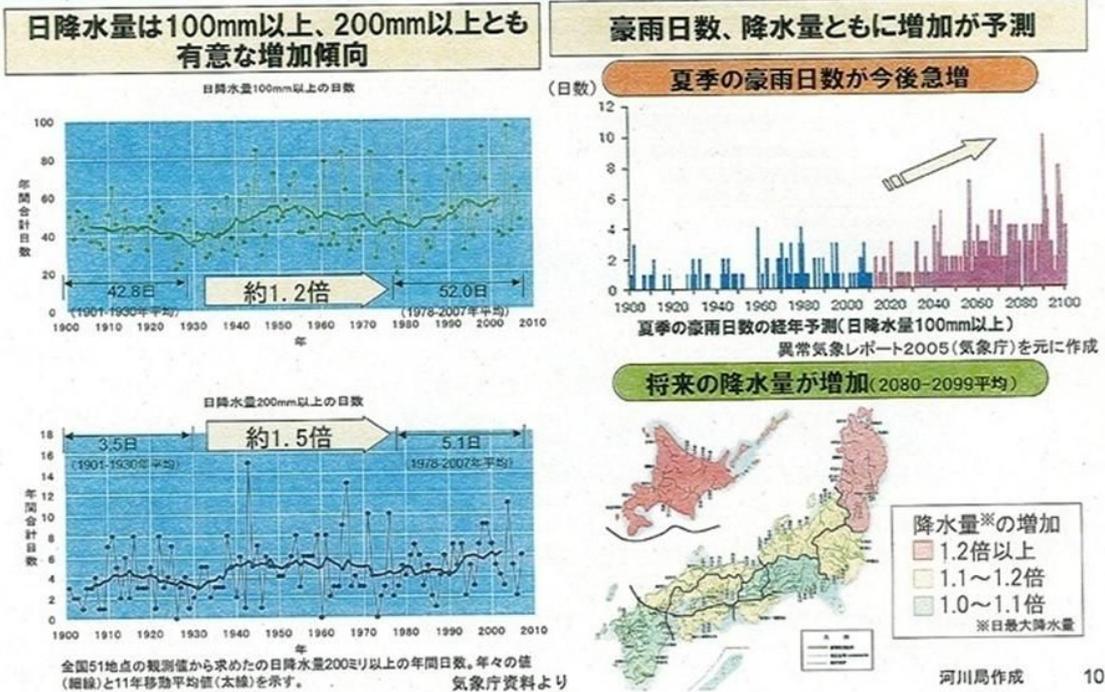


図3 日本の気候変動予測 (国土交通省)

こういう推定を知って、私たちはどうするか。これは当然、地域によって違ってきます。乾燥が進む地域は、ダムを造って水を貯めなくてはなりません。雨量が増加する地域は、ダムもメニューの1つとして治水対策をしなければなりません。日本列島は、基本的に温暖化による豪雨がさらに増えると予想されています。国土交通省河川局は、温暖化ガスを削減して低炭素社会をつくる一方で、温暖化の進行に伴い激増が予想される水災害に適応する「水災害適応型社会」をつくらうと主張しています。

しかし、殆どの方は、2050年までに25%炭酸ガスを削減する努力をすることが温暖化対策といっています。ですが、実は日本だけが削減努力をしても、温暖化は進みます。なぜなら、京都議定書には、アメリカは参加していません。巨大な産業振興をしている中国・インドも、発展途上国という位置づけです。つまり、それらの国には削減義務はないのです。日本だけ膨大な予算を注ぎ込んで25%減らしても、日本は現行で人類の放出する炭酸ガスの4%しか放出していませんから、地球上に出で行く炭酸ガスの全体の1%しか減らせません。自然科学者として冷静に考えれば、その取り組みはやってもやらなくても結果に大きな変化はないでしょう。むしろ、河川の治水対策をしっかりと考えることを勧めます。イギリスは、テムズ川の河口に巨大な防潮堤があって、1000年に1度の高潮に備えて造りましたが、地球温暖化で安全度が下がるため、更に安全度を上げるという温暖化対応プロジェクトを立ち上げています。日本はそういうことを何もやっていません。ではなぜ炭酸ガス削減を大騒ぎでやっているのかというと、天然ガスや石油石炭の値段をコントロールし抑える上で有効だという疑念もあります。本気で水害を心配しているならば、河川管理の予算を切ったり、ダムを造っている国土交通省を非難したり出来ないはず。まじめに考えなければなりません。

### (3) 生物多様性の危機

3つ目は生物多様性の危機です。色々な議論がありますが、国連の推定では、地球上の生きものは、現在名前が分かっている種類だけで約175万種、分かっていないのが約1000数百万種、合計で約1400万種となっています。これが現在、すごい勢いで絶滅している、あるいは絶滅を回避できない状態にあるというのが、生物多様性の危機です。問題はそのスピードです。そのスピードは生物学者によって様々な議論がありますが、おそらくは数千~1万種は絶滅を回避できない状態にあると思います。これは、どのくらいのスピードなのでしょうかと図4。過去の生物多様性を化石などから推定すると、5回多様性が落ちている時期があります。これが大絶滅です。一番最近の大絶滅が第5回目の白亜紀末（6500万年前）で、メキシコのユカタン半島の沖に超天体が衝突したことが分かっている、そのショックが大きな要因とされます。地球の気候が大攪乱され、地上では恐竜が、海中ではアンモナイトが絶滅しました。多くの学者が共通して主張していることは、現在の生物の絶滅スピードは、第5回目の白亜紀末の大絶滅のスピードよりも速いということです。現在の生物多様性の危機を放置しておくと、天体がぶつかった白亜紀末の大絶滅をやってしまうこととなります。生物多様性をどう守るかという議論の危機を支えているのは、こういう認識です。

### 生物多様性危機

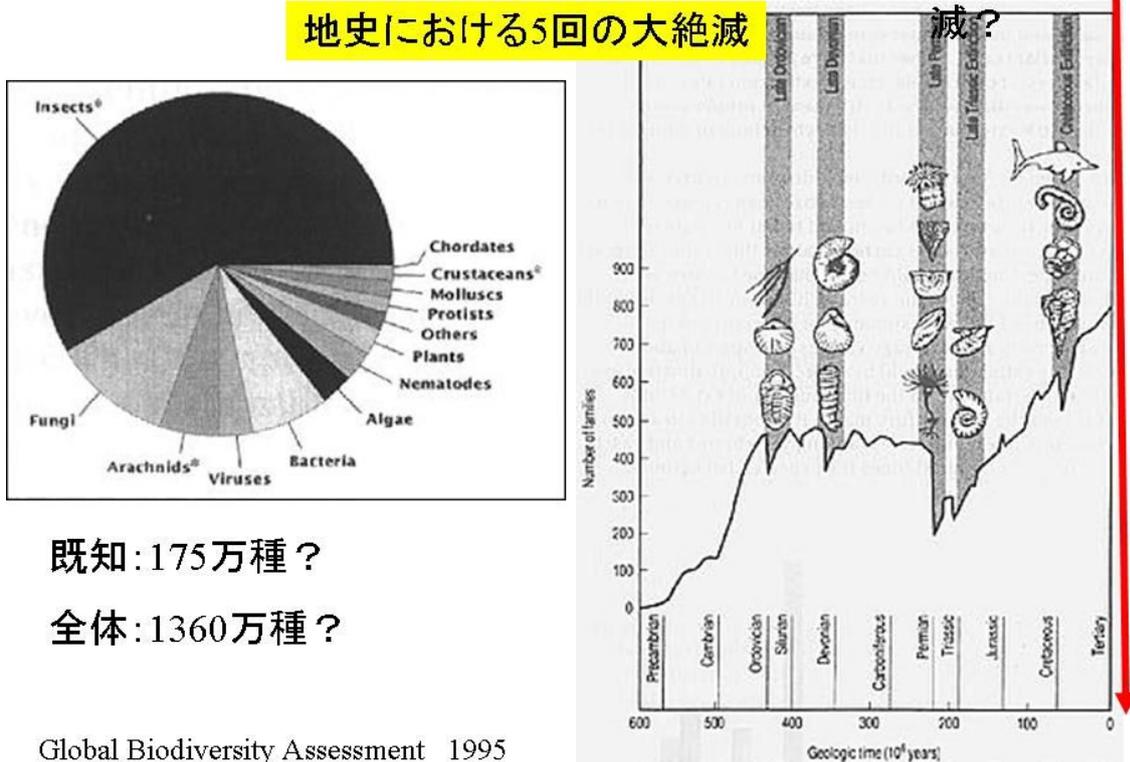


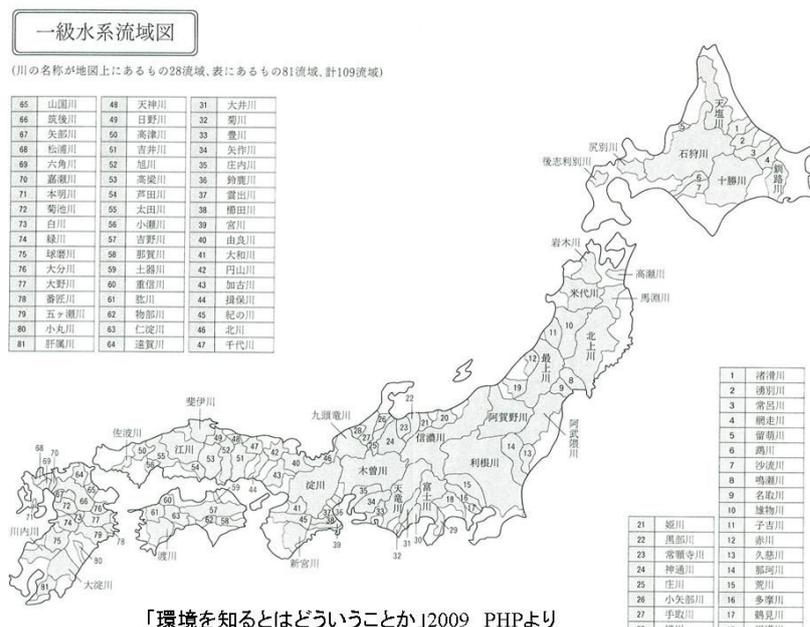
図4 生物多様性の危機

## 【地球環境危機の克服は、流域の地図から】

では、どうすればよいのでしょうか。人口・資源・食糧の危機、気候変動の危機、生物多様性の危機、それぞれについて、技術・制度・経済・倫理の対応など、あらゆる学者からいろいろな提案が出されています。今から30年位前は、「地球環境危機は体制の問題だから、資本主義から社会主義に変われば全部解決する」という声が圧倒的でした。私が学生の頃は、地球環境危機を文明論としていうと、そういうことを言うのは帝国主義者だといわれました。実際には、1989年に社会主義が崩壊してみたら、社会主義圏のほうが資本主義圏よりはるかにひどい環境破壊を起こしていたことが分かりました。技術・制度・経済・倫理、どれも重要ですが、これだけなのでしょうか。「私たちは、地球をまともに暮らすための地図も言葉も日常的な常識も持っていない、非常に不思議な文明動物である」という認識が広がっていると、私は感じています。「私たちが住む場所は宇宙でもなく、資源としての空間スペースとしての空間でもなく、生きた生きものの満ちた生命圏としての生態系としての地球表面であり、もう一度そういう世界に再適応して暮らしなおすための、言葉や地図や地上の習慣を作り直す」ということを、技術・制度・経済・倫理の対応と一緒にやらなければいけないと、考えています。

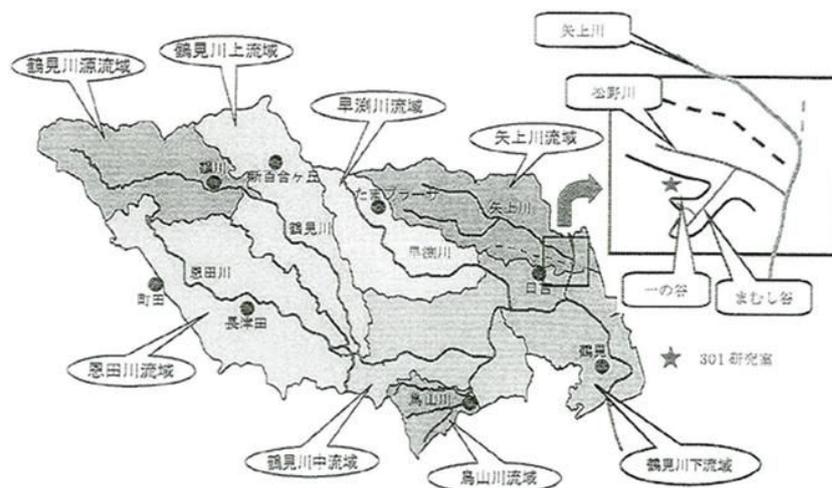
そのためには、「どこに暮らすのか」について、基本となる地図戦略が必要です。基本となる地図は、雨の降る大地の基本生態系、流域です。行政の地図ではなくて、流域を基本とする大地の地図を頼りにして、足元から地球を暮らし直していくことを「流域思考」と呼んでいます。あらゆる暮らしの足元で、暮らしの地図として行政区画だけではなくて流域単位で、地球環境危機に対応する安全・安らぎ・自然環境・次世代重視の流域文化を育てていけば、文明レベルの対抗戦略が出来るだろうというのが、私の考え方です。

日本列島は河川流域のジグソーパズル型になっています<図5>。実は私たちが住んでいる地球生命圏というのは、海と大砂漠と大氷原を除く雨の降る大地というのは、全部同じように分けられているので、別に人に線を引いてもらわなくても全て流域という単位でわかれています。その流域がわれわれの再適応すべき地球生命圏の足元の生態系だという認識を、全ての人が全ての地域でやれば、みんなが共存すべき生命圏を資源とか空間ではなくて認識できる、そういう文明運動を起こしたいのです。



例えば、鶴見川の流域は、うち約7割が丘陵、残る約3割が6500年前の縄文海進で海中だった沖積低地です。これを支流の流域や区間の流域に分けることができます。さらに分けると国交省が流域管理に使っている76小流域分け、さら細かく分けると私たちがどこにいるか分かります。現在、私たちがいる慶應日吉キャンパスを「行政住所」で言うと、「神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1慶應大学藤山記念館」です。自然の地形にそった「流域住所」で言うと、「日本列島・関東平野・多摩三浦丘陵・鶴見川流域・矢上川支流流域・松の川支支流流域・まむし谷中西方」です。私を含めて流域活動をしているメンバーは、この「流域住所」で私たちがいる場所に来ることが出来ます。なぜかといえば、川をたどって歩いていけば着くからです。私たち人類は、二本足で歩いて暮らしている400万年のうち99.9%は、採集狩猟動物として暮らしていて、そのとき地図は歩いて作ったはずです。今から2万年前の人と言葉が通じたとしても「自分は港北区日吉にいるんだよ」と言っても全く通じませんが、川についての認識が通じれば、「自分は日本列島・関東平野・多摩三浦丘陵・鶴見川流域・矢上川支流流域・松の川支支流流域・まむし谷中西方にいるんだよ」で通じます。

## ●流域は自然の住所



慶應大学の岸研究室の流域住所

●行政住所:神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1慶應大学第二校舎301岸研究室

●自然の住所:日本列島関東平野多摩三浦丘陵鶴見川流域矢上川支流流域松の川支支流流域・まむし谷・一の谷北肩慶應大学第二校舎301

図6 流域住所

人類はそもそもこういう地図で生きてきた動物なんです。農業文明を経て、産業文明を経て、行政住所にして地球を忘却したのです。足元から地球を喪失している、でも地球に暮らしていると錯覚して、それは暮らしているのではなくて地球を資源として、ただ篡奪しているだけだと私は思っています。もう一度この流域地図の元で、滅茶苦茶な都市の開発をしたら大水害という報いが来る、滅茶苦茶な農業をやったら農業基盤が破壊する、滅茶苦茶な都市基盤作りをしたら生物多様性との共存は難しくなる、流域生態系で考えれば分かるでしょうというコモンセンスを作らなければなりません。



## 【流域思考の実践例-②鶴見川流域】

小網代の谷の対極にあるのが、鶴見川流域です。「流域全部が自然状態にあるから守ろう」ではなく、「流域全部が水害の危機にあるから、危機にある流域を再生しよう。僅かに残った自然をみんなで応援して保全していこう。」という、流域単位の治水・防災・自然環境保全の動きを軸にして都市再生をしていったのが、鶴見川流域です。これを推進しているのが、「鶴見川流域水マスタープラン」という、流域の自治体と国土交通省が連携して推進している流域プランです。

### (1) 総合治水対策

鶴見川流域の場合には、国土交通省京浜河川事務所が、流域を単位とした治水である「総合治水対策」に長年にわたり取り組んできました。

今から 50 年前、下流の横浜市鶴見区・川崎市の一部をのぞくと、鶴見川流域は殆ど自然、日本昔話のような世界でした。田んぼと畑と森しかありませんでした。下流の市街地の先は埋立地で、日本の産業文明を担う京浜工業地帯があって、そこだけが市街地化していました。あとは山村でした。それから 50 年が経過し、流域の 85%超が市街地となりました。その結果、水害が多発しました。急激な開発をしたため、降った雨が地面に浸透しなくなり、一気に河川に流出し、氾濫しました。1958 年に大雨で氾濫したときは、鶴見区の人たちは「この水は町田から来た」と言っていました。私は当時子どもでしたが、当時の大人は「町田が開発したから、鶴見区で水害が起きている」と認識していました。このような状況の中、当時の河川のみを対象とした治水対策だけでは対処できなくなり、1980 年代に流域単位での治水である「総合治水対策」が、全国で初めて実践されました。「総合治水対策」のひとつの柱である「流域対策」には、「鶴見川流域の市街化調整区域は開発を抑制する」と書かれていました。私は、TR ネットが設立される前年の 1990 年から、ナチュラルリストの流域ネットワークを設立し、鶴見川源流域の自然を保全する運動を始め、翌 1991 年にはその一環として鶴見川の源流で開催した「鶴見川源流祭」というイベントに、総合治水対策の推進役である国土交通省京浜河川事務所に応援を依頼しました。趣旨は、「総合治水対策の流域対策では、鶴見川源流域の森（市街化調整区域）は保全した方がよいと書かれている。その源流域の森の保全に向けたイベントを開催するので、国土交通省京浜河川事務所にも応援に来てほしい」ということです。以後、この鶴見川源流祭に京浜河川事務所長は一度も欠席したことはありません。鶴見川源流域の森を、TR ネットを始めとした流域活動のメンバーは、「源流保水の森」と呼んでいます。「源流保水の森」は、約 400ha の開発計画が止まって、すべて緑が残っています。京浜河川事務所と源流ネットワーク、TR ネットの共同事業だと思っています。

### (2) 鶴見川流域水マスタープラン

総合治水対策を、治水だけではなく、河川の汚染・自然環境・震災防災への対応も流域単位で解決していくための施策として発展させていったのが、2004 年に策定された「鶴見川流域水マスタープラン」です。これが現在の地球環境危機を克服する地域戦略としては、世界最高であると本当に思っています。これを応援していかなければ先がないと思っています。鶴見川流域は、生態系の広がりです。一方で、鶴見川流域は、町田・稲城・横浜・川崎という行政区に分割されています。行政区で暮らすべき地域の地図を作って地球と対応するのではなく、流域という生態系を単位として考え直したら、生命圏の基本単位を介して地球と付き合えるのではないかということです。

TR ネットは、可能なあらゆる手段で「鶴見川流域水マスタープラン」を応援しています。鶴見川流域は、複数の行政区に分割されているため、調整を取らなければ、水害も抑えられない、

自然環境の保全も進みません。行政区は尊重するけども、流域地図を子どもから大人までみんなが共有して、仕事による必然で流域単位で仕事をしなければいけない河川管理者（国交省・自治体）を応援しています。流域ツーリズムも、この一環です。

## 鶴見川と危機の流域



鶴見川流域の位置図

### 鶴見川流域は バクのかたち



**鶴見川とは** 町田市北部の源流に発し、多摩丘陵・下末吉台地を刻み、横浜市鶴見区生麦で東京湾に注ぐ一級河川。本流全長42.5km。横浜、川崎、町田、一部稲城市に広がり、京浜工業地帯の中心部や港北ニュータウン、新横浜、多摩田園都市などの新興都市群を擁する。その流域面積の85%が市街地化された典型的な都市河川です。

**長さ 42.5 km 面積 235 km<sup>2</sup> 流域人口188万人の一級河川で**

**流域の85%が市街地化された典型的な都市河川**

河川管理者：国土交通省 神奈川県 東京都 町田市 横浜市 川崎市

→鶴見川流域水協議会の設置

図8 鶴見川と危機の流域

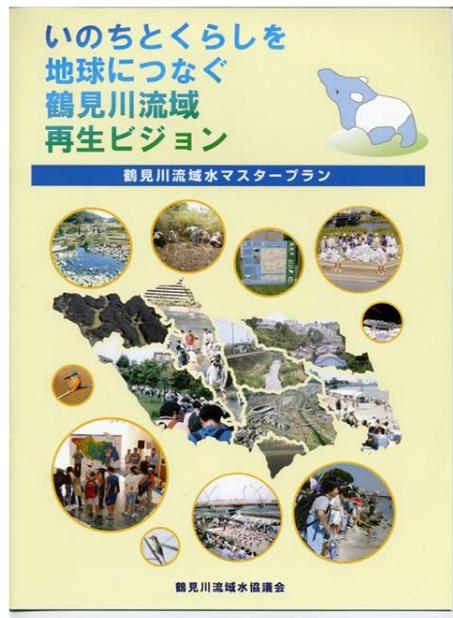


図9 鶴見川流域水マスタープラン

## 【TRネットがすすめる流域ツーリズム】

TRネットは、鶴見川流域で活動する44の市民団体からなる連携組織であり、事務局が調整役となって、流域全体で様々な事業に取り組んでいます。連携する市民団体が持ち場を持ち、自然や子どものお世話、地域のお世話をしています。この持ち場がそれぞれ、流域ツーリズムの拠点になります。TRネットはそれぞれの持ち場で、流域思考の都市再生を推進しながら、すべての可能な領域で鶴見川流域水マスタープランを応援しています。

例えば、生物多様性の保全です。市街化率98%の鶴見川支流・矢上川流域では、絶滅危惧種のホトケドジョウの保全を進めました。ホトケドジョウが矢上川流域内で唯一生息していた、矢上川源流・犬蔵地区が開発されることになったのですが、開発事業者とTRネットが協議し、開発後にホトケドジョウが暮らすための公園（現・宮前美しの森公園）が造られました。現在も、TRネットが公園の管理作業を実施し、ホトケドジョウが暮らしています。同じ矢上川流域の慶應義塾大学日吉キャンパスでも、キャンパスの自然の管理活動をしている日吉丸の会とTRネットで、ホトケドジョウが暮らすビオトープの改修工事を行い、保全ネットワークをより強固なものにしました。鶴見川源流では、源流ネットワークが、オオムラサキを絶滅させないために、源流保水の森を管理しています。綱島バリケン島では、ごみ溜めだったところを掃除して、素晴らしいビオトープをつくり、現在は子どもたちの遊び場にもなっています。

実は、これらの生物多様性を保全する拠点が、流域ツーリズムの拠点にもなっています。「流域で水害を抑えるために色々な施設がある、自然を守るためにたくさんの拠点がある、市民団体が日々活動しているたくさんの拠点がある、そういうところを全てたずねることが面白い。」というツーリズムを促しています。そのツーリズムと同時に、クリーンアップを実施すれば流域貢献になり、企業と連携すれば企業CSR活動にもなります。結果として、みんなが足元の流域の地図を共有するようになることを期待しているのです。こういうことが、足元の雨の降る地球の大地のありとあらゆる地域で進むことが、地球環境危機を一番ディープなところで乗り越えられる道と思っています。

人間をはかる時に、考えるべき課題に対応して、ふさわしい計り方があります。例えば、エレベーターに何人乗れるか考えるとき、体重に注目します。背が高いとか低いとか、勉強が出来るかどうかとか関係ありません。風呂釜を設計するとき、人間の体の容積に注目します。しかし、医師が人間の健康を守ることを考えるとき、1830年代に生物学者が全ての生きものは細胞で出来ていることを発見して以来、「細胞」という単位に注目するようになりました。だから、バクテリアを研究しても人間の医療の役に立つようになり、その研究の結果が人間の健康を支えています。これと全く同じで、私たちが地球の健康を支えて私たちと共生する世界をつくることを考えるとき、行政区とか面積ではなくて、流域と言う雨降る大地の細胞に注目して、もう一度計り直すという運動を始めなければなりません。その計り直しを支える一番大きなツールの一つが、流域ツーリズムなのです。

# バクの流域ツーリズム

マップの作成・頒布を通じた流域歩きの促進

→流域意識の育成・流域市民の形成・

鶴見川流域ウォーキングマップ



大地の凸凹にそって歩き直す

鶴見川流域  
駅からウォーク!  
バクの流域ツーリズム  
流域ワンダーランドを歩こう



私たちが暮らすこの街を



鶴見川 駅からウォーク!  
バクの流域ウォーキング 鶴見川 流域のウォーキングの情報は

<http://www.tr-net.gr.jp>

図10 鶴見川流域ツーリズム

発表：CSR 活動としてのエコ・ツーリズム

## 「いるか丘陵～小網代の谷における京急グループ CSR 活動支援の取り組み」

NPO 法人小網代野外活動調整会議、NPO 法人流域自然研究会 伊藤 隆広

### <要約>

品川から横浜、横須賀、三浦半島へ線路を延ばしている京急電鉄さんを中心としてレジャー・不動産などを展開している京急グループさんの企業CSR活動と、いるか丘陵・小網代の谷において、NPO法人小網代野外調整会議・NPO法人流域自然研究会が連携した事例について発表いたします。



### 【小網代の谷：京浜急行電鉄のCSR活動支援】

まず、小網代の谷における事例を紹介します。小網代の谷は、神奈川県が整備をされていて、NPO法人小網代野外活動調整会議が自然回復作業の実務をしているわけですが、企業さんからもたくさん支援をいただいております。三井物産・トヨタ・日本財団・富士フイルムなどより助成金支援をいただいております。シーボニアマリーナを運営していますリビエラリゾートさんからもご寄付をいただいております。京浜急行電鉄さんもその一つで、実際には小網代の谷の土地を神奈川県にご寄付いただいております。また、今年7月14日に、横須賀市立公郷小学校の環境学習をCSRとして支援していただきましたが、今回はこちらについてツーリズムの一環ということでお話しさせていただきます。

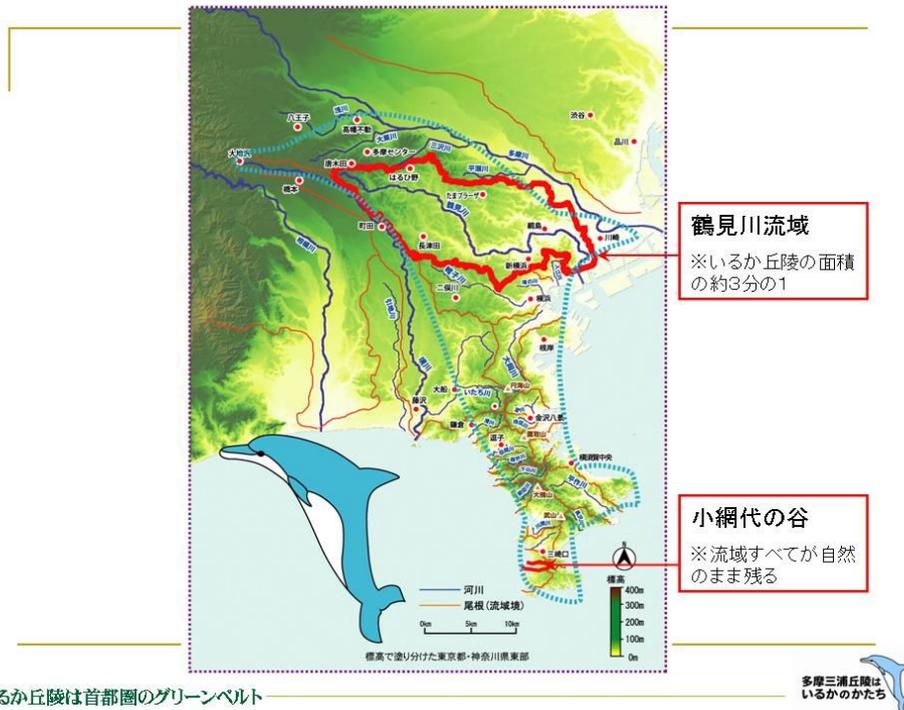
実施主体は京浜急行電鉄さんで、実際の学習活動を小網代野外調整会議で支援しました。参加したのは小学校6年生約120人、小網代の干潟の自然観察をした後、京急グループさんの油壺マリンパークを見学するという行程でした。私たちは、干潟の自然観察を支援させていただきました。当日は晴天に恵まれました。干潮の時間帯を狙ったので、カニの観察には最適で、チゴガニという小さなカニがダンスをする様子も見られました。スタッフは、森の様子を説明したり、この日だけでは観察できないカニの様子を展示して解説をしたりしました。

これらの活動の意義は、小網代の谷の次の課題が「干潟の保全」であり、干潟を環境教育の拠点とした活動を進めていきたいと思っていたところに、京急電鉄さんが干潟を利用した環境教育活動を実施してくださり、参加してくださった方も大変喜んでいただきました。干潟の保全に向けて強力な支援をいただき、干潟の保全に向けて一歩前進できた点で、大きく貢献できたのではないかと考えております。



小網代の干潟について解説

## 【いるか丘陵：京急油壺マリンパークとの連携エコ・バスツアー】



### いるか丘陵・小網代の谷・鶴見川流域

次に、小網代の谷と鶴見川流域を結ぶ事例をご紹介します。

NPO法人流域自然研究会では、いるか丘陵ネットワーク事業活動として、「首都圏グリーンベルト構想」と提案しています。首都圏には、広域で緑地を保全していくという計画が正式にはありません。いるか丘陵は首都圏でも緑地が多く残る丘陵地になっているため、首都圏のグリーンベルトにしていこうという活動をしています。具体的には、①いるか丘陵上の自然の保全活動を進める市民団体の支援・ネットワーク、②いるか丘陵普及啓発ツールの製作、③いるか丘陵エコツアーの実施です。最近②の一環で、「いるか丘陵ウォーキングガイド」をつくりました。今回は、③いるか丘陵エコツアーについて、詳しく説明させていただきます。

いるか丘陵エコツアーは「いるか丘陵とことんめぐり」と題して、ウォーキングを年3回、バスツアーも年に1回か2回実施しています。今回ご紹介するのは、京急電鉄・京急油壺マリンパークと連携したツアーです。

#### (1) バスツアー「新横浜巨大遊水地から小網代の森へ京急油壺マリンパーク裏側探検ツアー」

1つ目は2010年3月13日に実施したバスツアー「新横浜巨大遊水地から小網代の森へ京急油壺マリンパーク裏側探検ツアー」です。バスで日吉駅をスタート、鶴見川流域センターに立ち寄り、いるかの背骨にあたる横浜横須賀道路を通過して、京急油壺マリンパークを訪問、小網代の谷を楽しんで横浜に帰るとい、いるか丘陵南半分縦断ツアーをやりました。大人39名・子ども4名が参加しました。バスは、京急グループの東洋観光



を利用させていただきました。最初、鶴見川流域センターで足元である鶴見川の自然を学んで、バスの中では行く途中の足元の繋がりを体感できるツアーにしようということで、モニターで現在地を確認し、岸先生から解説をしていただきました。その後マリンパークで、普段は出来ないアシカと握手や裏側ツアーを体験しました。その後小網代の谷の見学をしました。

## (2) ウォーキングツアー「小網代の森ウォーキングと京急油壺マリンパークの水族館裏側探検」

2つ目は、2010年10月11日に実施したウォーキングツアー「小網代の森ウォーキングと京急油壺マリンパークの水族館裏側探検」を実施しました。三崎口駅から引橋まで路線バスで移動し、そこからウォーキングです。小網代の谷を展望した後、北側から谷を下りて干潟を見て、歩いて京急油壺マリンパークまで行きました。参加者25名でしたが、25名全員が鶴見川流域でTRネットが企画する自然体験学習に参加している「鶴見川バクの子ども探検隊」の子どもたちとその家族連れでした。したがって、鶴見川流域からいるか丘陵を通過して小網代へという、典型的な流域丘陵交流の企画になりました。

当日は非常に天気が良くて、富士山がきれいに見えました。小網代の谷では、保全の話をしているのは大人で、子どもたちはしゃがんでアカテガニを必死に探しています。子どもは子どもで自然と親しみ、保護者の方には保全の話をお願いいただけるという非常に良い形が出来ました。そのあとマリンパークに行って、イルカにもサプライズでタッチさせていただきました。

これらの活動の意義は、いるか丘陵の課題というのは広域連携であり、いるか丘陵の交流を市民・企業・行政、それぞれのレベルで進めていくことが必要ですが、その中でも、交通・レジャー産業を担う企業と連携して、エコツアーを展開し、市民に自然に関心あるような層を広げていくことは、交流の要と考えています。この要の交流を実現できたことが、大きな成果といえるでしょう。



子どもはアカテガニに夢中、  
保護者に小網代の谷の保全について解説

## 【地域密着の交通・レジャー産業と連携した「企業CSR型エコ・ツーリズム」】

いるか丘陵首都圏グリーンベルト構想は、丘陵を単位とした構想であり、流域と同じ自然の地形を単位とした構想です。岸先生の講演にあった「鶴見川流域水マスタープラン」と同様に考えれば、いるか丘陵上の都市再生に、生物多様性・温暖化適応策の視点を組み込んでいくことだろうと考えています。小網代の谷に関しても、鶴見川流域に関しても、拠点となる緑の保全は進んできました。その成果を今後どのようにしていくのかが、次の課題だということを認識として共有しています。1つは保全された緑地をどのように維持管理していくかということ、もう1つはその保全された緑地をどうネットワークしていくかということです。これらの2つの課題を組み合わせるとき、核となる主体は、地域に密着して、流域・丘陵ベースの広域的な視点を持ち、かつ都市生活産業の発展も、自然との共存も、どちらも支えていくことに関心のある市民・企業・行政であり、それらが連携していく必要があります。具体的には、交通・レジャーなどの都市産業との包括的な連携が課題です。この点で、今回のような京急グループと連携したエコツアーは、大変大きな成果を挙げることが出来、今後もいるか丘陵の交流を進めるうえで有効な手段になっていくのではないかと感じています。

企業側の視点から見たとき、企業CSR活動としての活用可能性が大いにあります。従業員対象のツアーやお客様を招待したツアー、内容についても自然環境の学習のほかにクリーンアップなど、多様な主体に貢献できる可能性があります。内容については私たちNPOが普段やっていることですが、それを企業CSR活動に組み込むことでより大きな社会貢献、企業にとってもプラスになっていくことではないかと考えております。

流域・丘陵ツーリズムは、自然と共存する都市再生を目的とした「都市再生型エコ・ツーリズム」ともいえます。「都市再生型エコ・ツーリズム」は、都市の再生と自然保全に対しても有効なツール、企業CSRにとっても有効なツールというふうに考えています。私たちNPOは、都市の自然保全に貢献する環境CSRの具体的な展開を希望する企業に対して、今までの経験を活かして企業CSR型エコツーリズムの具体的なメニュー提案をすすめ、一緒にやっていたらと感じています。

最後に、これらの発表を通して、京浜急行電鉄・京急油壺マリンパークに対し多大なご協力を頂きましたことに御礼申し上げます。

## 4. まとめ

- 都市再生型エコ・ツーリズムは、
  - ・都市の自然保全に向けて有効なツール
  - ・多様な主体に貢献できる、企業CSR活動としても有効なツール
- 都市の自然保全に貢献する環境CSRの具体的な展開を希望する企業に対して、**CSR型エコツーリズム**の具体的なメニュー提案をすすめ、多様な実施につなげてゆきたい。

発表：CSR 活動としてのエコ・ツーリズム

## 「鶴見川とおふろと子どもたち」

スーパー銭湯おふろの国 店長 林 和俊 氏、 井上 勝正 氏

### <要約>

スーパー銭湯おふろの国は、日曜日のお子さんの比率は15～16%、通常のスーパー銭湯は8%くらいですから、スーパー銭湯として子どもの比率が非常に高いめずらしい施設です。国道1号線と鶴見川に面しています。スタッフも近所の方が多いのですが、今まで鶴見川について何を知っているかという、かつて水があふれたとかいう情報ばかりで、今回TRネットさんとお付き合いさせていただいて、いろいろな勉強をさせていただいています。店舗の中の飲食ができる場所では、鶴見川を見ながら食事をする事が出来ます。ちょうどこの11月で10周年になります。

自然環境に対するCSR活動ですが、子ども目線での活動といったほうが分かりやすいかと思えます。



スーパー銭湯おふろの国（右側）と鶴見川

## (1) 鶴見川流域ツーリズムへの協力

鶴見川のウォーキングやスタンプラリーといった活動にご協力させていただいています。特にスタンプラリーはバクの絵が人気で、お子さんに好評です。

鶴見川に面した店舗ですが、国道1号線にも面しているのでお客さん自身は品川方面からの方が多いです。せっかく鶴見川に面しているのので、ジョギングで店舗に車を置いて走ってからお風呂に入る方もいますので、そういった方に色々な説明もさせていただいています。

ウォーキングなどのイベントのチラシを置いたり、貼ったりもしています。店舗を拠点にしたウォーキングマップをTRネットさんに作っていただきました。そういったものもフロントの脇で販売しています。



鶴見川下流リバーランナーMAP



バクの流域スタンプラリーへの参加

## (2) 鶴見川源流の竹を利用

今はお休みしていますが、TRネットの紹介も兼ねて、源流の竹を浮かべたお風呂もやってみました。また、源流の大きな竹を使って、子どもさんに願い事を書いて飾った、七夕のイベントもあります。



鶴見川源流の竹の七夕

## (3) 鶴見川水族館イベント

店舗駐輪場で、鶴見川流域水族館も開催しました。400人ほどの子どもさんが来て、全員ではありませんがザリガニのプレゼントもしていただきました。当日はザリガニを直接触ることが出来ましたが、子どもたちにとっては、小さな手の中のザリガニが全てです。データなど何の役にも立ちません。今手にしている実感こそ大事にしていきたい。絶滅したりすることは絶対に避けたいです。



鶴見川流域水族館

### 【子どもたちの、川・流域ツーリズムの癒しと笑顔の拠点にしたい】

まとめです。私たちの業界ではよく癒しといいます。癒しというと静かな中で放っておいて・・・という施設が多いのですが、私たちは笑いを癒しにと考えています。スーパー銭湯としては古い施設ですので、ソフトの部分で色々なイベントの中で、心の安らげる場所を提供して行きたいと思っています。せっかく鶴見川の前に店舗がありますので、TRネットさんと協力して、癒しの拠点としてますます進化させていきたいと思っています。TRネットさんの子どもに喜ばれているという部分と、私どもの家族連れが多いという部分をあわせて、今後も色々な形で取り組んで行きたいと思っています。

## 3. まとめ

- ◆ npoTRネット＝  
子どもに喜ばれるようなツーリズムを目指す
- ◆ おふろの国＝  
子ども・ご家族連れが多く来訪

▶ **子ども**に喜ばれるような、  
鶴見川流域の未来に貢献するCSR活動に  
今後も取り組んでいく

Yokohama Sasurumi  
スーパー銭湯  
おふろの国

発表：CSR 活動としてのエコ・ツーリズム  
「トレッサ横浜の流域・地域連携活動」

(株)トヨタオートモールクリエイティブ 取締役 栗原 郁男 氏

<要約>

トレッサ横浜と鶴見川のツーリズムとの関係をお話したいと思います。

トレッサ横浜は全部で 220 店舗が入っているショッピングセンターです。環状 2 号線をはさんで北棟と南棟に別れており、まっすぐ行くと新横浜、その先には富士山を臨む事が出来、トレッサ横浜は富士見スポットに登録されております。今年 8 月には鶴見川の花火、秋には十五夜のお月様など季節ごとの自然も感じていただける施設になっています。敷地面積 71,000 平方 m、総床面積は 160,000 平方 m で東京ドーム 4 つ分です。



【環境・地域に対する取り組み】

大きな取り組みとしての特徴が 2 つあります。1 つは、環境に対する取り組みです。豊かな緑ということで緑化の推進をしています。大気汚染防止効果の高いことをやっていますが、中でも壁面緑化とって、トヨタが 2005 年の愛・地球博で提案して実用化した緑化パネルと言うものを使っています。これは昨年、国土交通大臣賞を前原さんからいただきました。また氷蓄熱とって、屋上の大

きな水槽で氷を作って、昼間はその氷を溶かしてエアコンを回しています。更に照明に関しては、停電になっても電気を供給しなければなりませんので普通は発電機を持っているのですが、それでは余計な CO<sub>2</sub> が出るので地球温暖化に配慮し、バッテリーで電気を溜めて使う、あるいは水も中水利用と言うことで 5 2 箇所ある厨房の水を集めて、バイオで濾して、それをトイレの水に利用しています。そういうことから、CASBEE 横浜で商業施設としては最上級の A を取っています。

もう一つは、トヨタ自動車経営していますので、渋滞と言う面で特に対策を立てて取り組んでいるところです。交通シミュレーションをして、入り口と出口の位置を事前に確認しました。また、渋滞を外に出さないように施設内道路を 4km 造りました。渋滞を避けるため、駐車場入り

1 トレッサ横浜の概要

TRESSA  
YOKOHAMA



■所在地	横浜市港北区師岡町700番地(北棟)(南棟)
■面積	(敷地面積)約71,000㎡ (総賃貸面積)約60,000㎡
■用途地域	工業地域
■建蔽率	70%
■容積率	200%
■駐車場	約2,700台(土日祝は+450台)
■駐輪場	約1,050台
■来場者目標	1,100万人/年 ⇒ 08年 1068年 09年 1263万人

口のバーも設置しませんでした。バーを設置していませんので、トレッサ横浜の終日駐車場は無料となっています。ぜひお越し下さい。

### 【“ものづくり”と“教育”】

トレッサ横浜は、小さなお子さんとお母様、そしてお祖父様お祖母様にたくさん来ていただいているショッピングモールです。コンセプトとしては、発見・感動・集いの場であり、特に集いの場を提供したいと思っております。地域の人に愛される、一番好きな行きつけの店と言うことをポジションにしています。

そんな中でこだわっていることがあります。一つは、「ものづくり」です。フランスのカプラという積み木を親子で作っては壊すということや、ミニ四駆を作って遊んだり、更にトレッ菜園というレンタル菜園もあります。

もう一つ、「教育」と言う意味で、職業体験の受け入れもしています。中学校の職業体験ということで、いろいろなテナントさんと取り組んでいます。体験が終わると、色々な発見をしてくれます。休憩の時は楽しそうで、仕事になると急に真剣な顔に変わります。その中から、仕事は家族を支えるだけでなく、自分もけじめをつけるために大切な場所であると言うような感想を考えていってくれるような、新しい視点を持っています。色々な職業体験をしてもらっています。同じように職業体験という枠組みの中で、子どもたちの不用品を売ったり買ったりできる、かえっこバザーというものもやっています。

### 【イベントを通して、鶴見川流域を知ってもらう拠点に】

それで、自然との触れ合いということで、TRネットとの取り組みのことになります。まず、2008年にはトレッサ横浜リヨン広場に鶴見川流域のマップを置きました。お客様がそれぞれ、ご自分がどこから来たかをチェックしていただき、氾濫した時に自分たちの住んでいるところにどの位の水が出るかということ、防災マップを含めてお話ししました。2010年は、移動水族館でTRネット代表理事の岸先生にもお話しをいただきながら、タッチ水槽でザリガニやカニに触ってもらい、感触等を確かめて自然との触れ合いをしていただきました。

今年は、鶴見川クリーン&ウォークということで、鶴見駅に集合して流域をクリーンアップしながら歩き、最終的にトレッサに来て、トレッサの環境に取り組んでいるところを見ていただき、飲み物を提供して休んでいただきました。また、リヨン広場で移動水族館も開催し、三世代で来ていただき、それぞれの世代ごとにザリガニや鶴見川の思い出を語り合う姿が見られました。また若い人々も、綱島でウナギが捕れるということに驚いたりして、楽しい会話がなされていました。また今回は、人形劇を通して、子どもたちに鶴見川の自然について学んでもらうことも出来ました。更に、カンバッチつくりや工作を通して、子どもたちに流域のことを知ってもらう努力をしています。

トレッサ横浜として私たちに何が出来るかを考えてきましたが、いろいろなイベントを通して、トレッサ横浜に来る年間1300万人の来場者に、今日も日曜日で6~7万人ほどが来場すると思われませんが、鶴見川の防災マップや水族館や人形劇を見ていただき、トレッサ横浜が媒体となり、鶴見川流域のことを、みなさんに知っていただくことが出来れば幸いと考えております。ホームページやマップへの掲載、またスタンプラリーのポイントにもなっております。これからもTRネットと手をたずさえて、色々なことに取り組みたいですと思っています。

5 鶴見川流域ネットとの取り組み 一鶴見川防災マップ08年 TRESSA YOKOHAMA



5 鶴見川流域ネットとの取り組み 一鶴見川移動水族館09年 TRESSA YOKOHAMA



5 鶴見川流域ネットとの取り組み—クリーンウォーク鶴見川10年 TRESSA TOKOHAMA



5 鶴見川流域ネットとの取り組み—鶴見川移動水族館 10年 TRESSA TOKOHAMA

